

2023年9月5日(火)

老球の細道749号

「勝負の法則」からみたワールドカップ日本代表の戦い

試合でなかなか勝てなかった若かりし頃、先輩の先生たちによく言われたのは、麻雀をやれ、パチンコをやれ、飲み会は最後まで付き合い、などということであった。これらの理不尽なアドバイスを滅却するために、「孫氏の兵法」「宮本武蔵の五輪の書」「クラウゼヴィッツ戦争論」などの本を読んで、私なりの「勝負の法則」を12原則にまとめた。

勝負の法則の大原則は「実力には調子のよい時と調子の悪い時の幅がある。自分の最高の調子で、相手の最低の調子と戦えば、番狂わせは起こせる」ということである。

1・目的、目標を明確にする：何のためにやるのか、どこまでやるのか、大義名分を明確にする。目的、目標がないと「シーシュポスの岩」(努力が徒労に終わる喩え)の例えとなりうる。日本代表は「アジア1位となりパリ五輪出場」。願えばかなえられる。

2・心理戦で勝つ：勝利への執念、ボールへの執念、ゴールへの執念、積極的、攻撃的精神がミラクルを起こす。また、ホームコートアドバンテージで沖縄会場がほぼ日本代表。相手国は四面楚歌。

3・攻撃は最大の防御なり：日本の攻防の切り換えの速さは、それに付き合わされた相手チームは、後半スタミナ切れとなって、オフェンスリバウンドに入れない、トランジションDEFが遅くなってきた。

4・敵を知り、己を知る：スカウティングで相手チームの長所、短所を知る。カボベルデの連係プレイを分析し、キーマンのE・タバレスを11点に抑えることができたという。

5・石で卵をつぶす：自チームの強みで相手の弱みを攻撃する。スピードの mismatch が随所で功を奏していた。また、最後まで自分たちのテンポ、スタイルでゲームを戦い通した。

6・皆でやれば怖くない：身長差をカバーするために、随所で人数差の優位を發揮した。フリースロー後のダブルチーム、ゴール下のダブル、トリプルチーム。相手のターンオーバーをかなり誘発した。

7・局所戦で勝つ：ホーキンスのリバウンドでの貢献は、今までの日本は「ゴール下は弱い」神話を払拭した。また、フリースローだけで得点王になれる新たな可能性を示した。

8・組織力で勝つ：チーム OF、チーム DEF でケミストリーを起こす。チーム皆の信頼関係で個の特徴を最大限に活かす。富永にシュートが入るまで打たせることもチームルール。

9・意表をつく：デイフェンスを突然変えたりして相手の判断を狂わせる。今回は必要なし。

10・先手を取る：前半にリードされるケースが多く、今後の課題となるだろう。

11・持久戦に持ち込む：前半にリードされても後半勝負。個人のスタミナ、多くのメンバーを使えるチームスタミナの賜物だろう。「先手をとる」ができれば2次リーグ進出だった。

12・キス(KIS)しよう：「Keep it simple」。余計なものは捨て、簡単に。特に戦術プレイ、コーチの説明が簡単、明確は代表チーム(合同練習が少ない)に必須。日本バスケットの3本柱は、3Pシュート、激しいデイフェンス、切り換えを速くする。